

言葉の力を味わいながら読み深める子供を育てる第5学年文学的文章の指導

～物語文の学習過程における授業のユニバーサルデザインの手法の活用を通して～

所属機関 宗像地区教育研究所

所属校 福津市立福間南小学校

職・氏名 教諭 川上 泰 禎

1 主題設定の理由

(1) 国語科の今日的課題から

平成29年告示の学習指導要領では、「文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりする」点に課題があり、国語科における「思考力・判断力・表現力」を育成するには、児童が「言葉による見方・考え方」を働かせることが必要だと述べられている。令和4年度全国学力・学習状況調査においても、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることが課題として挙げられている。つまり、文章に書いていることを機械的に書き抜いたり自分が感じたことをまとめたりするだけでは、学習指導要領で求められる能力を育成するには不十分であることが分かる。

また、文部科学省より令和4年12月に発表された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」では、「学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒が通常の学級に8.8%程度在籍するという結果が示されており、「読む」「書く」「想像を広げる」といった国語科の学習内容に対して困難を覚える子供が在籍することを前提として授業を構成する必要があることも分かる。

(2) 児童の実態から

物語文の学習についての実態調査を行った結果、物語文を読む学習を「好き」と感じる子供は71.9%と意欲は高い子供が多い反面、28.1%の子供は「文を読み、考えることが苦手」「どう読めばいいのか分からない」のように、苦手意識をもつことが分かった。また、読み取る際の根拠については、87%の子供が「登場人物の会話文」や、「地の文で、登場人物の気持ちや行動が書いてある文」と回答していたが、実際の学習では、学級の約54%が物語の内容の大体を把握することができなかった。これは、物語の設定や登場人物の相互関係、心情変化について読み取れる本文の様々な言葉に着目することができず、その言葉に込められた意味を考えるとといった思考の深まりにまで至らず、その結果、物語の面白さや奥深さを感じることはできなかったことが原因と考えられる。

こうしたことから、物語の設定を確実に捉え、それをもとにして行動描写や情景描写といった、本文の言葉一つ一つに込められた登場人物の相互関係や心情変化を読み取り、物語を読む醍醐味を感じる子供を育てることが必要であると考え、本主題を設定した。

2 主題・副主題の意味

(1) 「言葉の力を味わいながら読み深める子供」とは

物語の本文の言葉一つ一つによって物語の世界観が構成されていることを感じ、それぞれの言葉をつなぎながらそこに込められた登場人物の思いや作者のメッセージを読み深め、自分の考えをまとめることができる子供のことである。

教科書に掲載されている物語には、細部にまで細かな表現の工夫がされており、それらの言葉の数々によって物語の世界観が構成されている。読者はこれらの優れた表現に気が付き、その奥に込められた意味に思いを巡らせることで、物語の面白さや奥深さを感じるこ

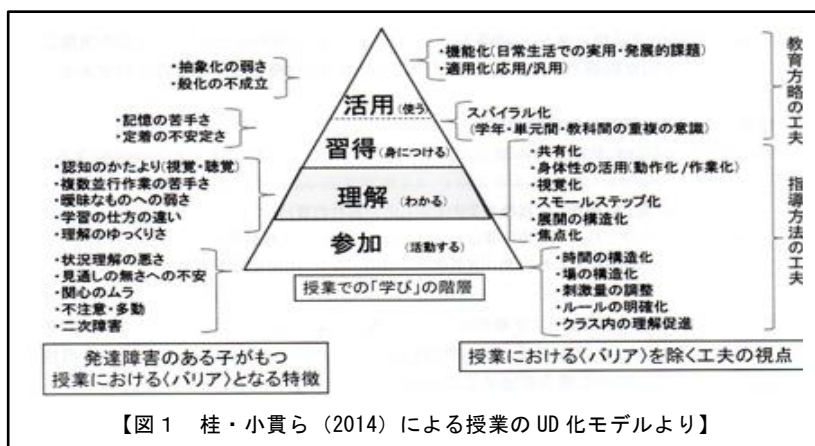
とができる。このことが、主体的に読書を進める子供へとつながっていく。また、言葉のもつ力を味わうことで、子供の語彙を豊かにし、言語感覚を研ぎ澄ませ、自らの表現力を高めることにも効果的であると考え。

(2) 「物語文の学習過程における授業のユニバーサルデザインの手法の活用を通して」とは

物語文の4つの学習過程（「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」）において、登場人物の相互関係や心情に迫るためのユニバーサルデザインの手法を取り入れ、全ての子供が「授業への参加」と「授業内容の理解」ができるようにすることである。

高学年の物語を読む学習では、中心人物の心情変化や相互関係を読み取る際、行動描写や情景描写等の事柄をヒントに考えるが、直接的に描写されている場合もあれば、暗示的に描写されている場合もある。そのため、何らかの発達特性を有していたり、国語の学習そのものに苦手意識をもっていたりする子供には、こうした学習活動そのものが苦痛になってしまう、学習意欲の低下や、将来必要となる学力保障の難しさにつながりかねない。

そこで、桂・小貫（2014）らが提案した「授業のUD化モデル」（図1）をもとに、本実践における取組を考えた。この手法を活用の上で、「授業への参加」「授業内容の理解」に焦点化した手立てを行い、言葉に着目し読み深める子供を育てるようにした。



【図1 桂・小貫ら（2014）による授業のUD化モデルより】

3 研究の目標

国語科において、言葉の力を味わいながら読み深める子供を育てるために、「読むこと」の4つの学習過程（「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」）のそれぞれに授業のユニバーサルデザインの手法を取り入れ、その有用性を明らかにする。

4 研究の仮説

物語文の学習過程において、どの子も参加できるようルールを明確化やクラス内の理解促進等を行った上で、登場人物の相互関係や心情に迫るために焦点化・視覚化・共有化を図る工夫をすれば、言葉の力を味わい読み深める子供が育つだろう。

5 研究の内容と方法

(1) 叙述に着目しながら、物語の内容を捉えるための視覚的手段の活用【視覚化】

「構造と内容の把握」の段階において、物語全体を見通し、視覚的に登場人物の心情変化を捉えやすくするために、「構造曲線」や「心情曲線」「関係の図示」等の手段を活用し、授業へ参加するハードルを下げるとともに、登場人物の相互関係や心情を捉えやすくする。

(2) 登場人物の相互関係や心情を捉える「センテンスカード」の活用【焦点化】

「精査・解釈」の段階において、登場人物の相互関係や心情を捉えることができるように、着目してほしい叙述に関するセンテンスカードを提示する。具体的には、

○人物の心情が読み取れる叙述に関して違う文を提示し、原文との違いを比較して考えることで着目したらよい叙述やその表現の効果に気付かせる。

○工夫された表現を取った文章を提示し、ある場合とない場合の違いを考えることでその表現効果を考える。

といった言葉の必要性に気付く活動を通して、読み取りに苦手意識をもつ児童がどの叙述

に着目したら考えをつくることができるのか理解できるようにする。また、その言葉の持つ意味や作者の意図についても着目させ、物語を読み深めることができるようにする。

(3) 必要感をもって互いの考えを話し合う場の設定【共有化】

焦点化・視覚化によって自分の考えをもつことができたとしても、自分の考えを伝え合うことがなければ、「どの子供も参加できる授業」とは言えない。どの子供も参加し物語の学習の楽しさを味わうためには、考えの共有化は欠かせない。しかし、ただ考えを言い合うだけでは、読みを深めることにはつながらず協働的な学びにはならない。そこで、どの子供も参加でき且つ話し合うことに必要性を感じることができるようにするために、以下の工夫を小グループでの対話に仕組むようにする。

- 国語リーダーを位置付けたグループ構成の工夫
- 小グループの対話の手順や対話の活性化を生む話し方の提示
- グループの対話の中身の視覚化

6 研究の実際と考察

第5学年 国語科 「物語の全体像を捉え、考えたことを伝え合おう 『たずねびと』

- 中心人物の心情変化を中心に物語の全体像を想像したり、表現の効果を考えたりできる。
- 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えをまとめることができる。 【思考力、判断力、表現力等】
- 行動描写や心情描写、情景描写を中心に、言葉の使い方への感覚を意識して、語や語句を使おうとする。 【知識、技能】
- 中心人物の心情変化を行動描写や心情描写、情景描写をもとに想像し、学んだことを生かして考えたことを文にまとめ、伝え合おうとすることができる。 【学びに向かう力、人間性等】

(1) 「構造と内容の把握」の段階

本段階では、この物語の内容の大体（あらすじ）を捉え、次の「精査・解釈」の段階で読み進めるために必要な心情変化のきっかけになる出来事に気付くことができるようにすることを目的とした。

第1時では、どのような物語なのかを確認し、第2時では、物語の設定や内容の大体を捉え、叙述をもとに綾の心情変化を追う活動を行った。ここでは、まず導入の段階で文章内容の細かい読み取りが苦手な児童や、物語の全体像についてイメージしにくい児童が学習へ参加するためのハードルを下げる手法として、



【図2 第2時の挿絵の並べ替えと心情曲線】

教科書の挿絵の順序を変えて提示した。挿絵を並べ替えながら、どんな出来事が起こったのかを整理し、物語のあらすじを把握できるようにした。この後、『綾』は『アヤ』にどのくらい興味をもっている？」と発問した上で、図2のような心情曲線を提示し、曲線を描いていく活動を通して、物語全体での中心人物の心情変化を捉えたり、心情が大きく変化したきっかけとなる出来事（ポイント）に気付いたりできるようにした。

【「構造と内容の把握」の段階の考察】

この段階では、第1時において物語の内容の大体について理解していた児童は27%であり、物語の中心人物の心情変化やその理由について捉えきれていない。第2時では、79%の児童が心情変化のポイントとなるおばあさんとの出会いの場面で曲線が変化して

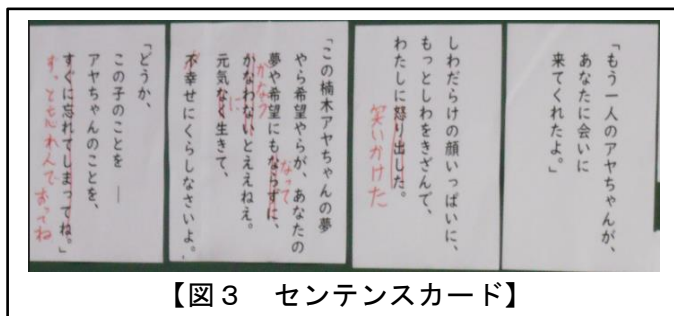
おり、心情変化のポイントを捉えられている。また、「おばあさんに、『アヤちゃんのことをわすれんでおってね。』と言われ、さらに上がった」というように、考えの根拠についても、本文の言葉をもとにイメージを広げながら述べることができた。このことから、挿絵の並べ替えや心情曲線といった手立てにより物語の内容が視覚化されたことで、中心人物の心情や行動描写に着目しやすくなり、物語の全体像や中心人物の心情変化を捉えることができたと考える。

(2) 「精査・解釈」の段階

本段階では、中心人物の心情変化に関連する場面を焦点化して取り扱い、叙述に着目しながら登場人物の相互関係や心情を捉えていくことを目的とした。

第3時では、登場人物であるおばあさんの役割に気づき、その存在が綾に与えた影響を読み取った。ここでは、まずゆさぶり発問によっておばあさんの存在の必要性を発問し、

その後、おばあさんの行動描写や会話文の中で、心情理解に関連する語句を図3のように反対の意味に置き換えてセンテンスカードにして提示し、内容理解に必要な部分について児童に意識させた上で、おばあさんの思いに迫ることができるようにした。子供は、センテンスカードの間違いに気付くだけでなく、「おばあさんは綾にどんなことを伝えたかったのだろう」の問いについても、「原爆で亡くなってしまったアヤちゃんは夢や希望を失ってしまったけど、綾には夢や希望があるから、アヤちゃんの分まで元気に生きてねと伝えたかった」や、「原爆のおそろしさを忘れず、アヤのことも忘れなくて欲しい」というように、本文の言葉をつなぎ想像を広げながら読み取ることができていた。



【図3 センテンスカード】

【「精査・解釈」の段階の考察】

この段階では、中心人物の心情変化に大きな影響を与えるおばあさんの必要性について理解していた子供は96%であり、その理由も、登場人物の行動描写に着目して答えを導き出していた。「おばあさんは綾にどんなことを伝えたかったのだろう」との問いにおいても、叙述をもとに想像を広げていた子供が70%見られた。このことから、センテンスカードを提示して重要な言葉に着目する手立ては、登場人物の相互関係や心情について焦点化して深く考える上で有効であったと考える。

7 成果と課題 (○：成果 ●：課題)

- 物語の学習過程における焦点化・視覚化・共有化の手だての工夫は、全ての子供の叙述の着目の仕方や考えのつくり方、そして互いの考えの深め方への理解を促し、言葉の力を味わう子供を育てる上で有効であった。
- 読み取ったことを習得し、活用していく子供を育てるための手立ての工夫。

参考文献

- ・文部科学省 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編」 東洋館出版社 平成30年
- ・一般社団法人 日本授業UD学会編 「テキストブック授業のユニバーサルデザイン 国語」 一般社団法人 日本授業UD学会 令和3年
- ・桂聖編著 「めあてとまとめの授業が変わる which型課題の国語授業」 東洋館出版社 平成30年
- ・桂聖編著 「教材にしかけをつくる国語授業10の方法 文学アイデア50」 東洋館出版社 平成25年
- ・小貫悟・桂聖編著 「授業のユニバーサルデザイン入門」 東洋館出版社 平成26年